

佳作

田中ひさ子の出来ない優しい

東京都 星美学園中学校二年 橋本祥帆

これは、私が学校の帰りの電車で見た光景です。それは今まで見たことがなかった優しさだったと思います。二つの出来事があって、どちらも心に残っています。

ある日、駅のホームで乗りかえの電車を待っているとき、男の一人とその両脇に小さな子供が階段からのぼってきました。親子だと思われず。父親は白杖を持ち、一人の子供と手をつないでいました。ここまでは親子の絆を感じたところですが、私はこの後の一人の子供の行動に感動しました。

「お父さん、もっとこっち！」

と言い、大きく背が高い父親を、小さく細い子供が精一杯の力を出してひっぱっていました。子供がとても大きく見えていました。そしてその子供の父親は小さく見えたのではなく、子供に感謝する気持ちとなんとなく悪いと思っっている様な感じがしました。

そして、これは行きの電車でのことです。私は、電車を降りて階段の方へと歩いていました。そうすると、見えてきたのは三十歳ぐらいの白杖を持った女性でした。白杖をととても上手に使っているところにも目がいききましたが、その女性はもう電車が来ていることに気づき、とても急いでいるようにも見えました。そして発車のベルがなり、女性が入ろうとした時ドアが閉まりかけました。その瞬間、電車の中にいた男の人は女性のためにわざと手をはさみました。その男の人はいやな顔をひとつせず、女性が乗るところを見ていました。女性はそんな

なことがあったとは知らずに、無事に乗ることが出来ました。この二つの出来事を通して、今までに感じたことのない気持ちになりました。父親を支え、子供も笑顔でいられること、子供に感謝する父親はひとつの絵になりそうでした。父親は自分の子供がどのような顔をしてひっぱっているのかはわからないのに、ありがたみを感じているようにみえたのは、絆なんだと思います。そして、目の見えない女性のために電車のドアにわざと手をはさんだ男の人は相手にたとえ見えなかったとしても助けようという優しい気持ちがあったのだと思います。

人は他人の優しさに気づかないことがあります。でも、それは、本当は目に見えるものであり、気づいていないだけなのです。今回の出来事は目にうつらない、ではなく、目にうつれないことなので、私も感動したのだと思います。これから、また、目の見えない人にかぎらず、困っていると感じている人を助けてあげたい。優しさをうみだしたい。たとえそれが目にうつすことが出来ない優しさであっても。